

# こどもへの付き添い・面会

.....\* 特集にあたって \*.....

## 付き添い・面会が織りなす「こども・家族」の声に耳を澄ませる

2024年度の診療報酬改定で付き添い家族への支援が盛り込まれるなど、小児看護に対する社会的な関心は高まっています。一方で、採算性の問題や物価高騰など、病院経営を取り巻く経済的な厳しさは増すばかりです。2026年度の診療報酬改定によって病院の経営が少しでも改善されることを期待していますが、すぐに効果が出るものではありません。限られた資源・人員のなかでこどもにとって最善のケアを提供しようと奮闘する皆さんは、日々葛藤やジレンマを抱えていることでしょう。このジレンマは、新たな発想や連携を生み出す原動力にもなります。こどもにとって安心・安全な環境とは何か。その答えを探すうえで、「付き添い」や「面会」という視点から改めて小児看護を考えてみたいと思います。

付き添いや面会は、こどもを中心として考えることが前提です。ただ、付き添い・面会が一律によい影響を与えるわけではありません。付き添いによる家族の負担はいうまでもありません。家族の面会があると体調を崩す思春期のこどもに出会ったことはないでしょうか。付き添いがない期間を経て、驚くほどの成長を見せるこどもを目の当たりにしたことはありませんか。親から離れて入院生活を送るなかで、それまで知らなかったこどもの適応力や自立心が花開くこともあります。

2020年に始まった新型コロナウイルス感染症の流

行では、これまでの対応が通用しないことを突きつけられ、混乱のなかで付き添いや面会の支援を何とか実践したという医療者は多いことでしょう。小児病棟、施設での付き添い・面会の方法は新型コロナウイルス感染症の流行を機に変化しているのではないのでしょうか。このように、私たち医療者は日々変化に対応し、そのときの最善は何か・誰のための最善かを考えながら進まざるを得ないと感じています。

本特集では、さまざまな分野で活躍する皆さんに執筆をお願いしました。執筆依頼に快諾してくれた、看護の最前線で活躍されている実践者の皆さん、組織として意思決定していく管理者の皆さん、これまで教育・研究を通じて看護に携わってきた教員の皆さん、患者・家族の皆さんと、筆者に小児看護の素晴らしさを教え導いてくれた恩師である筒井真優美先生に感謝を申し上げます。

付き添いや面会という場面に隠された、こどもの思いや家族の物語に気づき、それらを丁寧に紐解くことで、小児看護はさらに深みを増すことができると考えます。本特集がこども・家族、そして医療者が互いの力を最大限に生かせる一助になることを願っています。

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院看護部  
看護副部長／小児看護専門看護師、認定看護管理者

太田有美 Ohta Arimi